
テイルズオブジアビス ～ミュウの異世界冒険記～

にい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブジァビス ～ミュウの異世界冒険記～

【Nコード】

N3028Z

【作者名】

にい

【あらすじ】

エルドラントの最終決戦から幾分か時間が経過したある日。

ミュウはチーグルの森にて未だルークの帰りを待ち続けていた。

悲しみに耽るミュウ、そんな彼に突然運命の光が瞬く。

絶体絶命のピンチにミュウを救った光とは――

そんな有りがち設定ではありますが、ミュウの成長物語を最後まで見届けてくれると光栄です。

ちなみにこの小説も以前別のサイトにて投稿していたものです。
完結もしていますし、バックアップもそのまま残っているもので、加
筆修正しながら投稿するだけの簡単な作業です。

第1話 いきなりピンチ!? VS 骨(前書き)

初めましての人は初めまして！

TOSからの人はこんにちは！

今回投稿させて頂くのは、今からするとちょっと古い(?) だけど名作中の名作、ジァビスの長編です。

歩いて喋るソーサリーリングことミュウが主役の成長物語、最後まで見届けてもらえると光栄です。

第1話 いきなりピンチ!? VS 骨

——よしっ！ お前は今日からブタザルだ！

大好きなご主人様が付けてくれた名前。

——なんだとっ！ ブタザルのクセに生意気なっ！

尻尾を振りまわしたり、頬を引っ張ったり、時々意地悪だったけど……

——俺、変わるよ……変りたい……

『変わる』と誓ったあの日から、前以上に優しくなったご主人様。

——よしっ、ミュウ！ 俺が合図したら火を吹くんだぞ！

一緒に戦った日々、モンスターの威嚇や、障害を駆除するのが自分の役目だった。

そして……

——ミュウ、お前は仲間たちの元へ帰れ。

それがエルドラントで訊いた最後の言葉……

それ以来、ご主人様は僕の前から姿を消した。

緑浴に満ちた幻想的な森林。

チーグルの森と呼ばれるその森林は、地名通り聖獣チーグル達が群れを成して暮らしている。

その最深部には堂々と聳え立つ巨木が存在する。

チーグル達はその巨木の中を住処に生活を送っていた。

チーグルは仲間意識の高い種族である。今までも協力し合って生活を送っていた。彼らに抗争と言う言葉は似合わない。

だが、そんな彼らの輪から外れ、ずっと悲壮な表情を浮かべながら黄昏れている一匹のチーグルがいた。

お腹に『ソーサリーリング』という貴重品を身につけ、青い毛をした子供チーグル——

「あの子……森へ返ってきてからずっと元気ないわね」

「そうだね。僕達に何か出来ることがあればいいのだけれど……」

仲間のチーグル達が元気のないその子を見て、同情の眼差しを向ける。

「ずっと慕っていた主人が死んじゃったんでしょ？ 今はそっとしてあげておいた方が——」

茶色の毛のチーグルがその言葉を発したとき、ずっと仲間の言葉に無反応だった彼の長い耳がピクツと反応を示した。

そして彼——ミュウは威嚇するように毛を逆立てながら言った。

「ご主人様は死んでないですよっ！ 必ず生きて返ってくるって約束……約束を……」

言葉を詰まらせたと思ったら、ミュウは突然大粒の涙を流した。

「（約束……したはずですよ……でも……どうして帰ってこないですの……？）」

ミュウには主人と慕う人間が居た。

主人の名はルーク・フォン・ファブレ。彼はとある技術で人工的

に生み出されたレプリカという存在だった。

オリジナルよりも力も劣る彼は、当時『自分の価値』を見失いがちであった。自分がレプリカだということを卑下し、悲観的になることもしばしばあった。

しかしミュウはそれでもルークを慕っていた。

オリジナルである男よりもレプリカであるルークだけを慕った。

その一途な思いがただけルークの救いになったことかミュウは知らないが、それだけルークのことが大好きだった。

そして数年前、ルークは栄光の大地エルドラントにて、ようやく『自分の生まれた意味』を見つけることができた。

しかしそれは自らの命に危険を侵すものでもあった。

ルークは、ミュウに、そして仲間達に必ず帰ってくることを誓い、崩れゆく都市の中で、光に包まれていった。

それ以来、ルークの姿は見えていない……

「……っ！」

ミュウは大粒の涙を浮かべたまま、ダッシュでその場を去って行った。

仲間達が静止するように声を上げていた気もするが、感情的になったミュウの耳には届いていなかった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

涙を風に靡かせ、地を濡らしながら、ミュウはただひたすらに走る。

仲間に涙を見られたくないわけではなかった。でもなぜかあの場には居られなかった。

ミュウはただ無心で走っていた——いや、どこでもいいから一人になれる場所を求めてひたすら走っていた。

「はあ……はあ……ふう……」

住处とはかなり離れた場所でミュウは一息吐く。走っている内に涙は乾いていた。

しかし、渴いたのは涙だけではない。

「喉が渴いたですの」

小さな身体で三十分近くも走った為、ミュウの疲れはピークに達していた。

ミュウは近くの湖に身体を乗り出し、ちゅうちゅと水を飲み始めた。

「……ぷはあ……」

たくさんの水を身体に飲み入れたミュウは、そのまま水面に浮かぶ自分の顔をじっと見つめた。

その時に思うことも、たった一人のご主人様のことだけ……

「（ご主人様……今、どこにいるのです？ 会いたいのです……今すぐにでも——）」

そんな切なる願いを込めるミュウ。

ぞっ……

その時、背後から足音に似た音が耳に入ってきた。

「（みゅみゅっ！？ この重みのある足音、冷たいようでどこか暖かさを感じるオーラ……ま、まさかっ！？）」

ミュウはこの足音に聞き覚えがある。期待に膨らみを混めてミュウは静かに振り返った。

そこに居たのは――

「ぐ、ごごごご、ご主人様！ 帰って……帰ってきてくれたですの
~~~~~」

ミュウはたまらず、背後に居た人影に抱き付いた。

「ご主人様、ミュウはこの日をずっと心待ちにしてたですの、またお会いできてうれしいですの、すりすり~ですの。ああ、このゴツゴツとした感触、たくましい腕、冷たい温もり、間違いなくご主人さ――」

ぎゅむっ！ びった~~~~んっ！

ミュウが軽く暴走モードに入っていた最中、人影は突然ミュウの

耳を引っつかみ、地面に思いつき叩き付けた。

「い、痛いのです。ご主人様何するです……あぁっ!？」

叩きつけられたことで少し平静を取り戻したミュウは、改めてその人影を見て驚きの表情を表した。

「お、お前は……ご主人様ではないのですのっ!」

ミュウ曰く、ゴツゴツとした感触、たくましい腕、そして冷たい温もりを持った人影は臨戦体制に入っていた。

どうやらミュウがいきなり飛び付いた行為が、この相手は敵意を持っていると勝手に勘違いしてしまったみたいである。

「お、お前は……たしか……死霊スケルトンですの!」

死霊スケルトン、一言で言えば強暴な骸骨。

物理攻撃に耐性があるとは言え、水に弱いわ、風にも弱いわで、弱点の方が多く見積もられているという、言わば雑魚モンスター。

補足しておくが、ルークの容姿はこんな骸骨ではない。

共通点ゼロのスケルトンをどうやってたら自分のご主人と間違えられるのか、ミュウに問いたいくらいだ。

しかし、ミュウはそれどころではない危機に面している。

「みゅみゅっ！　ここは逃げるですの〜！」

即座に背を向け、ダッシュで逃走に移るミュウ。

相手が弱点だらけの雑魚とはいえど、子供チーグルに勝てるほど甘い相手ではない。逃走と言う判断は正しい選択だったのかも知れない。

だが、一度敵愾心を見せられたスケルトンもミュウの後を追い掛けてくる。鈍足そうな姿とは異なり、意外に足が早い。

でも、ミュウは足の早さだけは自信があつた。こんな雑魚骸骨などすぐに突き放すことはくらい軽いはずである。

しかし、スケルトンと自分との差はむしろ詰まってきた。

どうやら先ほどの全力疾走の疲れがまだ残っているようであり、足の節々に痛みが生じている。

「みゅみゅっ！　大体なんでスケルトンがチーグルの森にいるのです！？　あいつはアクゼリウス第14坑道にしか出没しないのではなかったのですの〜！？」

ちょっとしたプトリビアをぼやきながら必死に逃げるミュウ。

一見、余裕があるようにも見えるが、実際はかなり切羽詰っていた。

「（このままでは確実に追い付かれるですの……仕方ないですの……ここは覚悟を決めて、ミュウは戦うですの！）」

決意の炎を胸に抱き、覚悟を決めたミュウはクルリと振り向いてスケルトンの正面に対峙した。

「ふぁいあ〜っ！」

偶然にもミュウの突然の攻撃は不意打ちの効果を放った。  
スケルトンは回避する間もなく、腹部にミュウファイアが炸裂する。

「グガうつ！」

スケルトンは奇声を上げるが、ミュウファイアが命中した腹部には特に損傷は見当たらなかった。

ほとんどダメージを受けていない様子である。

スケルトンは右手に構えた棍棒を振りかざし、一気に振り下ろす。  
ミュウはギリギリの所で攻撃を交わすと、再び背を向け全速力で走り出した。

「や、やっぱりダメですの〜〜〜〜っ！ 勝てっこないですの〜〜〜〜っ！」

半べそを描きながら、走るミュウ。

逃げ切れない、戦えない、怖い、の三拍子が揃った今、ミュウは絶体絶命だった。

そんな絶体絶命のミュウの脳裏に浮かんだのは、かつての仲間達の姿だった。

「（ティアさん、ガイさん、ジェイドさん、アニスさん、ナタリアさん！ 助けてですの……っ）」

ミュウは必死に心中で助けを乞う。何も出来ない自分の無力さを

悔やみながら……

そして、ミュウの脳裏に自分にとって一番大きな存在が浮かび上がる。

「（ご主人様……っ！ 助けて……ですのっ！）」

スケルトンはついに自分の間合いの中にミュウを捕えた。  
今度こそ攻撃が当たると核心したスケルトンは棍を大きく振り翳す。

——だがその時、ミュウの身体に異変が発せられていることに気付いた。

ミュウのお腹に眩い光が発せられていた。  
いや、正確に言うと、ミュウのお腹に着けている装飾品が光を放っている。

「（こ、これはどういうことですかっ!? ソーサリーリングが光っているのですの!）」

光は更に眩しく、そして強く、光を放ち続けている。  
目を開けられないほどの光が辺りを包む。

その中心に居たミュウはどうすればいいのかわからずオロオロするばかりであった。

そして爆発的な光がソーサリーリングを中心に放たれた。

「みゅっ!? みゅみゅみゅ~~~~~っ!」

ミュウの叫び声だけが、辺りに轟く。その叫び声は徐々に遠ざか

って行くように聞こえた。

そして、瞬時に光は収まった。

そこにはミュウの姿が完全に消え失せていた。

——ちい、座標がずれたか……

声がする。どこからするのかは分からない。

——まあいい、この世界に転送は完了した。

だけど、その声は異様な威圧感を放っている。絶対的な力を持つ者が放つ恐ろしいオーラ。

——後は部下に回収を急がせるとするか……

それっきり声は聞こえなくなる。ほっと胸を撫で下ろし、安堵する。

そしてミュウの意識はゆっくりと回復していくのであった。

## 第1話 いきなりピンチ！？ VS 骨（後書き）

見てくれてありがとうございます！

それにしても40000文字制限はすごい！

これなら思ったよりも早く完結できるかもです。

第2話は明日投稿予定。1日1本上げることが目標に頑張っていきます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3028z/>

---

テイルズオブジァビス ～ミュウの異世界冒険記～

2011年12月10日18時48分発行